

## 愛媛県大島宮窪地区の村落手話（地域共有手話）における二種類のタイムライン

矢野羽衣子(日本ろう福音協会)・松岡和美(慶應義塾大学)

## 1. 研究の背景と目的

村落手話(Village Sign Language、地域共有手話 Shared Sign Language とも言う)とは、ろう者の住民が(遺伝上の要因で)特に多いコミュニティで用いられる、ろう者と聴者の両方が用いる手話言語をさす。手話類型論の研究を通して世界各地の様々な村落手話の存在が確認され、記述も進んでいる(Zeshan and de Vos 2012 など)。村落手話は従来、ジェスチャーが抽象性を高めることで、ろうコミュニティで確立した手話言語(日本手話・アメリカ手話など)に発展するプロセスの「中間段階」と捉えられてきたが、近年の手話類型論の研究では村落手話が(ろうコミュニティで確立した)手話言語に変化した例はないことが指摘され、村落手話は該当地域の使用に最適な形で独自の発展を遂げた手話言語の一形態とする説が提案されている(Nyst 2012:566)。

日本には「日本手話」という日本語とは異なる言語が存在するが、それとは別に村落手話も存在する。先行研究には奄美大島における村落手話の原型ととらえられるホームサイン(Osugiほか1999)の報告があるが、文法に着目した村落手話の特性に関する研究は、国内にはほとんど存在しない。本研究は危機言語となっている村落手話の記述と保存を目的とするプロジェクト(矢野ほか 2014、Yano and Matsuoka 2016、矢野・松岡 2017)の研究成果の一部として、宮窪手話では時を示すタイムラインに2つの種類があることを報告する。

## 2. 調査対象の地域と方法

愛媛県大島の今治市宮窪町宮窪地区では 2010 年時点で 2292 人(国勢調査)が生活し、その中に 18 人のろう者がいる(矢野・松岡 2017)。そのろう者は、聴者と共有する村落手話「宮窪手話」を用いて生活している。世界各地の村落手話と同様、宮窪手話も現在のろうの使用人数は数十名といわれる危機言語である。図 1 は、宮窪手話が使われている地域を示したものである。宮窪町内のうち、宮窪漁港付近の「浜」と呼ばれる地域に宮窪手話の話者が集中している。

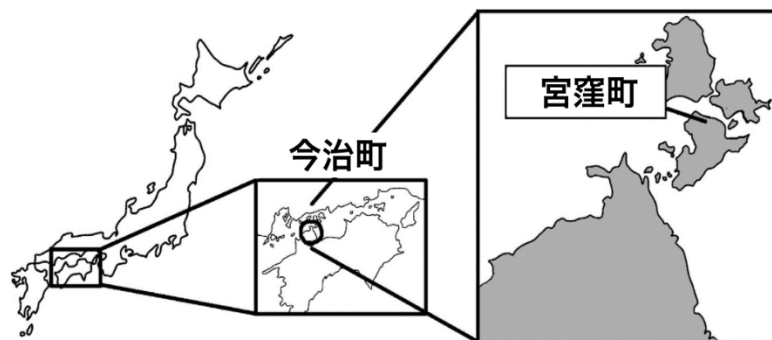


図 1 宮窪町の位置

本研究では、宮窪手話を母語として獲得し、現在も主たる言語として使用しているろう者へのインタビューを動画で記録し、分析した。インタビューおよびデータの書き起こしは、宮窪手話を母語とするろう者(矢野)が担当した。

### 3. 「時」のメタファーとしてのタイムライン

#### 3. 1. 身体を基準点に用いるタイムライン

音声言語において「時」の概念が「空間」で表現されることは先行研究で報告されている。例えば Traugott (1978)が指摘しているように、英語では未来は話者の前の空間への言及で表され(look forward to the years ahead)、過去は話者の背後にあるように表現される(look back on the past)。Lakoff(1993:217-218)でも、話者が未来へ向かって前方に移動したり、時が話者の正面から後ろに流れていくメタファーが論じられている。これらの例が示しているのは、話者の身体の位置で過去が終り、同じ位置から未来が始まる「話者の身体を基準点とする」空間の使い方である(移動の方向が逆になる言語については Núñez and Sweetser 2006 を参照)。

手話言語でも、話者の身体を基準点とするタイムラインが観察される。例えば日本手話で過去(/昨日//昔//以前/)は話者の利き手側の肩の後ろの空間を指す表現で表され、未来に関わる表現(/明日//今後//後/)では、話者の前の空間に向かって手指を動かす表現が用いられる(岡・赤堀 2011, 松岡 2015)。同種のタイムラインは欧米の手話言語でも観察されている(Friedman 1975, Engberg-Pederson 1993)。日本手話のタイムラインを、図2で示した。

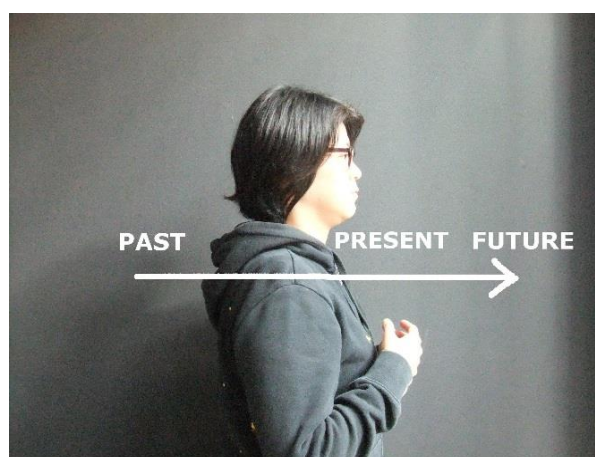


図2 日本手話のタイムライン（過去—現在—未来）

宮窪手話にも身体を基準点に用いるタイムラインが存在するが、その空間位置は日本手話と大きく異なっている。下の写真にあるように、宮窪手話では、話者の体の前の空間を用いて、利き手側の横の空間から身体の正面に向かう直線によって時の流れが示される(Yano and Matsuoka 2016)。

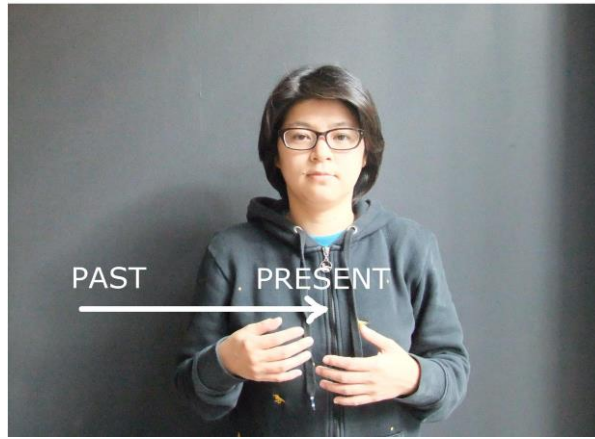


図3 宮窪手話のタイムライン（過去—現在）

宮窪手話では、未来は話者の前の空間位置を使わない方法で表出される。図5は、宮窪手話の「2年後」を意味する表現である。

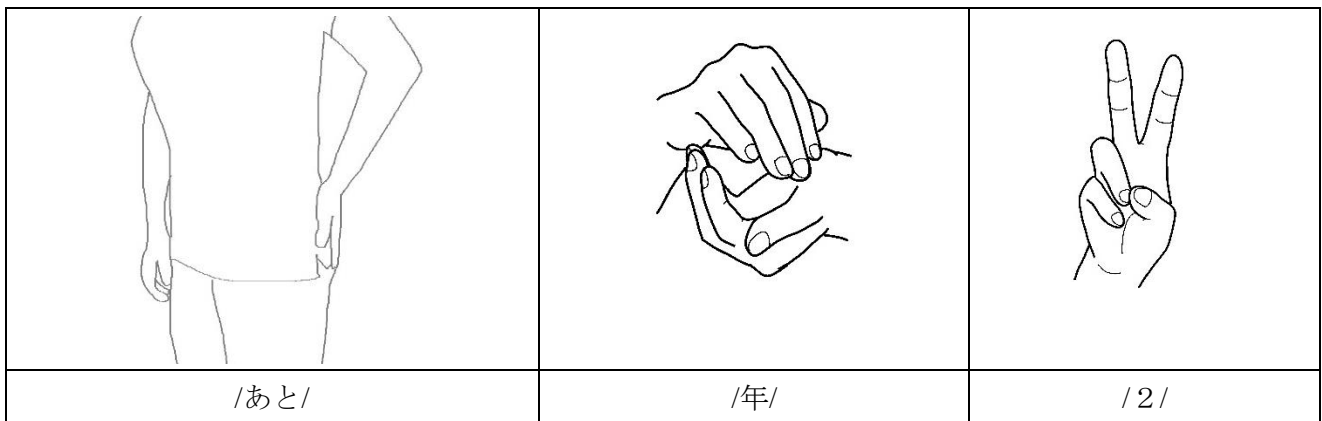


図4 宮窪手話「2年後」

「未来」に関わる空間表現の欠落には、言語表現において過去と未来が必ずしも対照を成さないという Traugott (1978)の洞察が当てはまる。たとえば英語の場合、過去形は屈折接辞で表されるのに対して(walked-walk)、未来形は助動詞等を要する(will/be going to walk)。

次節では、日本手話には見られない宮窪手話のもう1つのタイムラインについて述べる。

### 3. 2. 宮窪手話の天体タイムライン

村落手話の研究において、身体を基準とするものとは異なる種類のタイムラインがあることが報告されている。たとえばインドネシアのバリ島北部の使用されている村落手話カタコロック語(Kata Kolok)の話者は、実際の太陽の位置を指さす「天体タイムライン」を用いて時刻を示す(de Vos 2012)。カタコロック語の話者が方角を時間と結び付ける文化を持っていることは、「朝」という意味の手話単語が、話者が手話表出に用いる空間の中で最も東に近い位置で表出されることからうかがえる。

興味深いことに、この「天体タイムライン」は、音声言語を用いる聴者も使用することが明らか

になっている。Floyd (2016)によると、ブラジルのリオネグロ地方で使われているニェエンガトゥ語 (Nheengatú)の話者は、発話と同時に天体タイムラインの特定の位置を指さすことによって、音声発話内で言及されていない正確な時刻の情報を付け加えることができる。これらの先行研究は、時のメタファーが言語表現に取り込まれる際、視覚・聴覚というモダリティの差は本質的な問題ではないことを示唆している。

宮窪手話では、身体を基準とするタイムラインと天体タイムラインの併用がみられる。図5に示したタイムラインによって一日の時間帯(朝一昼一夕方)が表される。タイムラインが進む方向は話者の身体が基準とはならず、実際の方角(東西南北)によって決定される。(下記の図のA・Bは、図7に示す手型と対応している。)

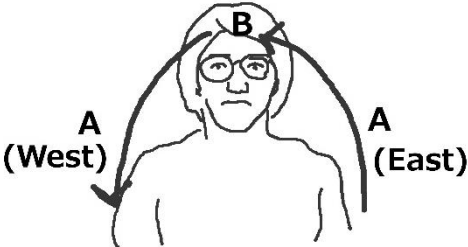
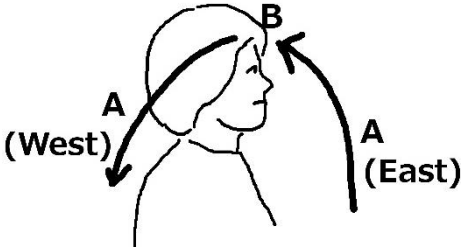
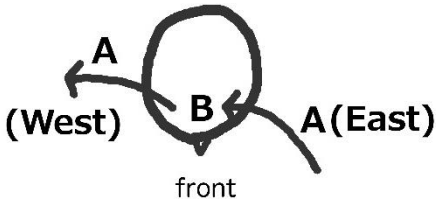
話者が南方向に面している場合	
話者が東方向に面している場合	
話者が南東方向に面している場合	

図5 宮窪手話の天体タイムライン

先行研究で報告されている天体タイムラインの使用では、話者がタイムライン線上の位置を指でさすとされているが、宮窪手話の場合は、正午を除いてタイムラインでは決まった手型が用いられる(図6)。

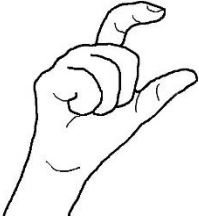

	
正午以外の時間に用 いられる手型（手型 A）	/正午/で用いられる 手型（手型B）

図6 宮窪手話の天体タイムラインで使用される手型

Froyd(2016:38)は、天体タイムラインが観察される地域は赤道直下にあることを指摘し、その理由としてそれらの地域の太陽の動きが一定であることをあげているが、愛媛県で使用されている宮窪手話はその一般化にはあてはまらない。すなわち、宮窪手話の天体タイムラインは、赤道直下の地域の言語のものとは異なる経緯で発生した可能性が考えられる。

#### 4. 結論

本研究では、日本の村落手話である宮窪手話にみられる2種類のタイムラインについて報告した。ひとつの手話言語に複数のタイムラインが存在することは以前から指摘されている(Engberg-Pederson 1993 のデンマーク手話の例など)。しかし、身体を基準点とするタイムラインと天体タイムラインを併用する言語の例は、これまで報告されていない。宮窪手話は、身体を基準点とするタイムラインと、天体の動きを基準点とするタイムラインの2種を使い分けるという点で他の村落手話や音声言語とは異なっており、今後のタイムライン研究に重要な知見を提供するものであるといえよう。

#### 謝辞

本研究に参加してくださった宮窪手話の話者の皆様と Connie de Vos 氏に、心からお礼を申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP26284061（研究代表者：松岡和美）の助成を受けたものです。

## 参考文献

- de Vos, C. 2012. Sign-Spatiality in Kata Kolok: How a Village Sign Language of Bali Inscribes its Signing Space. Ph.D. dissertation. Nijmegen: Max Plank Institute for Psycholinguistics.
- Engberg-Pederson, E. 1993. *Space in Danish Sign Language: The meaning and morphosyntactic use of space in a visual language*. Hamburg: Signum-Verlag.
- Floyd, S. 2016. Modally Hybrid Grammar? : Celestial Pointing for Time-of-Day Reference in Nheengatú. *Language* 92(1): 31-64.
- Friedman, L. (1975). Space, Time, and Person Reference in American Sign Language. *Language*, 51(4), 940-961. doi:10.2307/412702
- Lakoff, G. 1993. The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony. ed. *Metaphor and Thought (2nd ed)*, (pp. 202-251). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 松岡 和美 2015. 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』東京：くろしお出版。
- Núñez, R. E., and E. Sweetser. 2006. With the future behind them: Convergent evidence from Aymara language and gesture in the crosslinguistic comparison of spatial construals of time. *Cognitive Science* 30(3): 401-450.
- Nyst, V. 2012. Shared Sign Languages. in R. Pfau, S. Steinbach, and B. Woll. eds. *Sign Language: an International Handbook*. Berlin: Walter de Gruyter, 552-574.
- 岡典栄・赤堀仁美 2011. 『文法が基礎からわかる 日本手話のしくみ』東京：大修館書店。
- Osugi, Y. T. Supalla, and R. Webb. 1999. The Use of Word Elicitation to Identify Distinctive Gestural Systems on Amami Island. *Sign Language & Linguistics* 1(2), 87-112.
- Traugott, E. (1978). On the Expression of Spatio-Temporal Relations in Language. In J.H. Greenberg. ed. *Universals of Human Language, Vol 3, Word Structure* (pp. 369-400). Stanford, CA: Stanford University Press.
- 矢野羽衣子・松岡和美・平英司 2014. 「愛媛県大島のビレッジサイン（手話方言）における数と時の表現」日本言語学会第 149 回大会ポスター発表。愛媛大学。
- Yano, U. and K. Matsuoka. 2016. Number, Time Line, and Spatial Expressions in a Village Sign Language in Japan: A Preliminary Study of Ehime-Oshima Island Sign Language. An oral presentation at the 12th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR12), hosted by La Trobe University, Melbourne.
- 矢野 羽衣子・松岡和美 2017. 「愛媛県大島宮窪町の手話：アイランド・サイン」『科学』5月号, 415-417 ページ。
- Zeshan, U. and C. de Vos. eds. 2012. *Sign Languages in Village Communities*. Berlin: Walter de Gruyter.